

樹木と絵画の交差点

第2回 ～長谷川等伯・久蔵の描いたマツとサクラ～

長谷川等伯（1539-1610）は、安土桃山時代から江戸時代初期にかけて活躍した絵師です。能登（七尾市）に生まれ育ち、絵仏師を生業としていましたが、30代で京都に上り、千利休の知遇を得て頭角を現し、ついには天下人豊臣秀吉に重用されました。

京都に出るのが遅く、いわば遅咲きでしたが、豪快さと繊細さを併せ持つ自由闊達な画風で、桃山画壇の最高峰である狩野派の天才絵師、狩野永徳（1543-1590）とその一門を脅かすまでの存在になりました。

鶴松の菩提を弔うマツとサクラ

古来日本ではマツは画題として好まれてきました。四季を通じて緑の葉の色を保つマツは長寿の象徴と考えられたためです。浜辺とマツ、いわゆる「白砂青松」は、やまと絵の伝統的モチーフとなっています。

豊臣秀吉は晩年に生まれた息子・鶴松がわずか3歳で早世すると深く悲しみ、鶴松の供養のために祥雲寺（現智積院）を建立します。障壁画の制作は気鋭の絵師長谷川等伯とその一門に白羽の矢が立てられました。鶴松の名にちなみ、祥雲寺にはマツをモチーフにした障壁画をはじめ、多くの障壁画が描かれました。秀吉はこれらの絵をととても気に入り、等伯に知行200石を授けます。この大仕事により、等伯の名は世に知れ渡ることとなりました。

とりわけ等伯の長男・久蔵が作画を担当した「桜図」は、瑞々しさと風格を合わせ持つ出来栄えで評判を呼びました。しかし久蔵はそのわずか2年後26歳で亡くなります。将来を囑望された矢先の突然の出来事でした。



長谷川等伯 「松に秋草図」(1593年頃) 国宝 智積院蔵

マツが大胆に画面を横切って雲の広がりと共に大きく画面にリズムを作るのに対し、手前に繊細な曲線で描かれた草花との取り合わせが鮮やかに決まっています。豪華絢爛な金碧画でありながら、幼い鶴松をしのぶような柔らかい優しさを湛えた景色です。

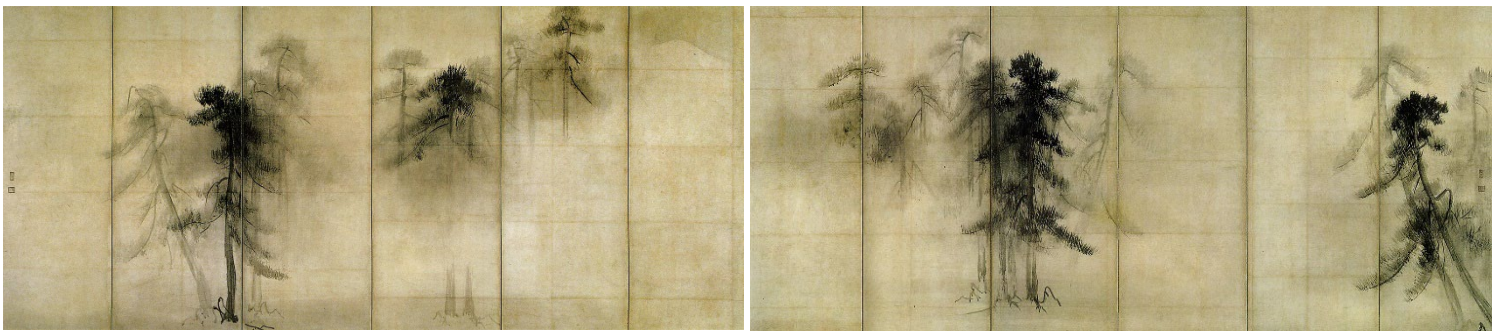


長谷川久蔵 「桜図」部分（1593年頃） 国宝 智積院蔵

満開のヤエザクラが今を盛りと咲き誇るその瞬間を捉えています。迫力ある構図を支えるデフォルメのバランスが巧みです。描かれているサクラの花弁は絵具で盛上げられてひとかたまりの大きさは拳の大きさほどもあり、実際に絵の前に立つと圧倒されます。日本最初の総合的な画論である『本朝画史』の中で、久蔵の絵について「精密であり、清雅さは父に勝る」と記されています。

望郷のマツ

等伯の代表作であり、日本独自の水墨画の境地を開いたとされる傑作「松林図屏風」は謎が多い作品です。制作年は不明、何のために描かれたのかも推測の域を出ませんが、長男・久蔵を失った後の時期に描かれたと言われています。形式的な画題として描かれることが多かったマツですが、この松林図は数多くある「松図」「老松図」とも異なった独自の画境を開きました。失意の中、故郷の七尾の景色を思いながら描いたであろうこの絵からは能登地方特有の厳しい気候（日照率の低い曇り空や強い季節風）が感じられるようです。等伯は眼だけにとどまらず心にも残る風景をつくりあげました。



長谷川等伯 「松林図屏風」（16世紀 桃山時代頃） 国宝 東京国立博物館蔵

霧がかかったようにぼんやりした瞑想的な空間、手前のマツの激しく荒々しい筆づかい。後年、等伯が語ったことを残した『等伯画説』の中で、等伯は理想の絵画としての「静かなる絵」を語っています。この絵はまさに等伯が目指した「静かなる絵」が実現されているように思えます。
※この作品は、完成作ではなく障壁画制作のための下絵ではないかという説もあります

京都のサクラについて



フゲンゾウ

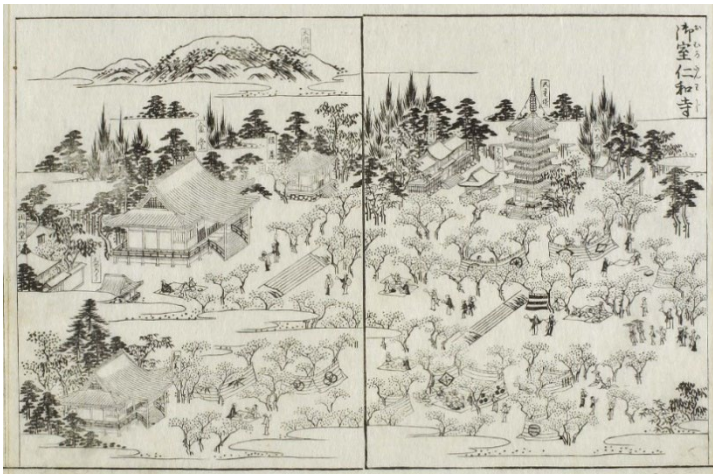
撮影場所：新宿御苑（東京都新宿区）

等伯・久蔵が障壁画を描いた東山七条の祥雲寺（現智積院）や、等伯が多く内装を手掛けた紫野の大徳寺、等伯が狩野永徳と障壁画の仕事を争い、永徳に敗れた仙洞御所（京都御苑内）など、現在残る等伯ゆかりの場所にもサクラがあり、今でも春には花を咲かせ人々を楽しませます。

久蔵が描いた丸くふんわりとした花弁のサクラは、ヤエザクラ（サトザクラ）の一種と思われます。ヤエザクラの一種「普賢象（フゲンゾウ）」“*Cerasus Sato-zakura Group 'Alboprosea' Makino*”は室町時代からある古い品種だといわれており、長谷川親子も京の町で目にしていたかもしれません。

京都のサクラの名所のひとつに仁和寺の御室桜（おむろざくら）があります。仁和寺は888年（仁和4年）に完成、のち鎌倉期には門跡寺院として最高の格式を保ちました。応仁の乱（1467-1477）で一山のほとんどを消失して以後江戸時代初期に再建されました。復興以降は花見の名所として名高く、1780年（安永9年）刊行「都名所図会」にも取り上げられています。

現在は「御室有明（オムロアリアケ）」“*Cerasus Sato-zakura Group 'Omuro-ariake' Ohwi*”を中心に「御車返（ミクルマガエシ）」“*Cerasus Sato-zakura Group 'Mikurumakaisi' Koidz*”、「御衣黄（ギョイコウ）」



“*Cerasus Sato-zakura Group 'Gioiko' Koidz*”、「太白（タイハク）」“*Cerasus Sato-zakura Group 'Taihaku' Ingram*”、「普賢象（フゲンゾウ）」などサトザクラが約200本あります。御室桜の特徴は遅咲き、背丈の低さです。地盤が粘土質の土壌で固いため、樹高が2-4mほどの灌木状となり、地上から20-30cmで花をつけます。

「都名所図会 御室仁和寺」（1780年 刊行） 国際日本文化研究センター蔵

《参考文献》

黒田泰三「長谷川等伯」新潮社 1997年（新潮日本美術文庫）

黒田泰三「もっと知りたい長谷川等伯－生涯と作品」東京美術 2010年（アート・ビギナーズ・コレクション）

《参考 URL》

「仁和寺について」「御室桜について」仁和寺 ホームページ

http://www.ninnaji.jp/about_outline.html http://www.ninnaji.jp/cherry_tree.html（参照 2022-7-16）

「多摩森林科学園サクラデータベース」国立研究法人 森林総合研究所 ホームページ

<https://db.ffpri.go.jp/sakura/home.php>（参照 2022-7-16）

《画像提供》

大学共同利用機関法人 国際日本文化研究センター